



私たち介護に携わる者に 課せられた使命

平成17年10月の開設以来、ユニットケアの運営ポイントの一つである少人数ケア体制・職員の固定配置を堅持し、入居者との顔馴染みの関係をつくることで、徹底的に入居者の暮らしの継続のサポートを行ってきました。それが認められ、この度、高齢者住宅経営者連絡協議会主催のリビング・オブ・ザ・イヤー 2015 大賞を受賞することができました。

これからの超高齢社会に向け、高齢者住宅業界の発展のため、すばらしい取り組みをしている高齢者住宅を、業界内だけではなく、たくさんの一般の方々に知っていただく機会をつくろうと開催したのがリビング・オブ・ザ・イヤーです。

施設を立ち上げてちょうど10年という節目の年に当たり、特別養護老人ホームも、有料老人ホーム同様、歴とした住まい、暮らしの場であることを広く知ってもらいたいという強い思いで応募いたしました。いまだに特別養護老人ホームに対して「収容の場」というイメージをもっていらっしゃる方もおり、それらを払拭できればと考えました。

開設前、私自身、いろいろな施設を見学しました。その際に見た初めての介護現場に、大変衝撃を受けたのを、今でも鮮明に覚えています。そこは「暮らしの場」ではなく、まさしく「収容の場」でした。

廊下に一列に並べられたお年寄り。また、大きなホールに集められ、職員が立ったまま慌ただしくお年寄りに食事介助を行っている光景を目の当たりにし、こういった施設では暮らしたくない、そのとき強く感じました。

以後、「自分が暮らしたいと思える施設とは」と自問自答の日々が続き、ようやくユニットケアという介護の手法に出会ったのです。

ユニットケアの理念である「暮らしの継続」は、誰もが当たり前前に望むことであり、このすばらしいケアの手法・根拠をしっかりと学び、個別ケアの実践に取り組んでいくという決意を固めました。

たとえ施設に入居しても、いくら認知症になったとしても、リビングの掃除をしたり、食器を洗ったり、洗濯物をたたんだり。くぬぎ苑では、これまで家庭で行っていた暮らしを営めます。わがままではない、「その人らしさ」、つまり、その方の好み・こだわり・生活リズムを職員がしっかりと受けとめ、入居者個々の暮らしの継続をサポートしているのです。

有料老人ホームであろうと、特養ホームであろうと、グループホームであろうと、施設の種別に関係なく、介護に携わる者に課せられた使命は、入居者の「暮らしの継続」をサポートすることであると私は確信しています。

立派なハードも大切ですが、「入居者の暮らしを、地域を巻き込みながら徹底的にサポートしていくんだ」という強い思いをもった職員を、一人でも多く育成することがそれ以上に大切であり、それこそが、これからの超高齢化社会を乗り越えていくための大きな原動力になるのではないかと考えます。

さらには、そのような職員を育成することは、高経協が掲げている理念、「終身にわたり、尊厳ある暮らしを支える」の具現化にもつながるのではないのでしょうか。

今後も、私たち介護に携わる者に課せられた使命を忘れることなく、強い思いをもった職員を一人でも多く育成し、この介護業界が活発で魅力ある業界になるよう努力してまいります。

三木 康史

みき・やすふみ

● PROFILE

社会福祉法人くぬぎ会理事長、高齢者住宅経営者連絡協議会会員。

